
Get to the point. ~魔女?~

stern

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Get to the point. ～魔女？～

【Nコード】

N1525U

【作者名】

stern

【あらすじ】

7、8年くらいに書いた、超短編小説を見つけた。

バレンタインのお返しに書いたものだったはず……

季節外れのホワイトデーということぞ、どうでしょう？

真実の愛とはどういうものをいうのかと、私は幾度となく考えてきた。そして、やはり『見届けることこそが真実の愛である』という考えに落ち着いた。

ついこの間の出来事だ。

ベッドで微睡まゆみみながら、昨日も一緒に寝たアイツの寝顔を寝覚めに見ようとしたが、アイツはもう、温ぬくもりだけを残して消えていた。じゃあ、私も。と思ったのだが、アイツの匂い いや、香り、かが心地よく、その誘いに逆らうことなく、私はもう一眠りすることにした。

Get to the point .
魔女？

私がアイツと同棲を始めたのは2、3年くらい前だった気がする。今日みたいに心地よい気分で座り込み、テレビを見ていたときだった。

「私、もう迷わない。一緒に住もう?」

私はこれでも家柄はよく、父と母は美男と美女で、私もそれを受け継いでいる自信があった。そして、それに加え、祖母は気品にあふれており、

「太っているのは普段食べている食事が粗末極まりなく、それ以前に育ちが悪い」

と、豪語するほどの女性であった。

だから、アイツがいきなり家に駆け込んできて、あんな事を言い出した時は一瞬何を言っているのか分からなかった。

まあ、別に私はもう大人であり、軽く門前払いをしようと思ったものの、少し遊び心がわいた。少々遊んでやるうかと付いて行こうとした時、私が大人であるにもかかわらず、父と母は猛反対した。それはもう見事に私の前に立ちはだかつたのだ。

だが、そうやられると、逆に心をくすぐられるものだ。それは『開けてはいけません!』と書かれた箱を開けたくなる衝動によく似ている気がする。

従って、私の遊び心はますます強くなり、荷物をまとめて家を出た。

そうそう、家政婦は反対はしていなかったなあ。

もし、コイツとの遊びに飽きたら、すぐに元の家か他のヤツの家に行こうと考えていていたのだが、訪れて早々、私はその衝動に駆られた。

何を隠そう、コイツの家は狭くて仕方がなかったのだ。一人暮ら

しをしているのはわかるが、テレビが1台しかないのはどうにかならないものか。そうでないと、外からの情報が手に入らないじゃないか。そして、このままおよそ3年経つものの、この状況は一辺として変わらなかった。それに平気になってしまった私は、過去の自分はもう少し強く訴えるべきであったかな？　と思い耽ってみる。全く、慣れというのは全くもっておそろしいものだ。

しかし、慣れたといっても、それは去年ぐらいの話だ。先ほど言った通り、私は此処に来てすぐにどこかに行こうという衝動に駆られていた。

まあ、その、ふらふらつとね。仕様がないだろう？　帰ってきたらドアは開いてなかったし、合鍵なんてものは持ってなかった。最後の手段として窓からの入室を試みようとするも、さすがにそれははしたないと思い、止めることにした。

大抵アイツは家にいたしなあ。要約すると、その日、帰ったのはいいものが入る手段が何もなかったのだ。時間にして夜で、遠くのほうから部屋の窓をのぞいてみると、明るかったのが窺えた。

どうやら、明かりを点けたまま寝てしまってたようである。

そもそも、携帯電話の類も持っていなかったので、私はどこかで時間を潰そうと、街へ出ることにした。

せっかく私がアイツの生活に慣れ始めたのに、その矢先にこういうことになるとは思ってもよらなかった。私は自慢の毛皮のコートを羽織ったまま夜の街へ繰り出すことにした。

街はあらゆる文字が光っていて、人も多く、ソイツらを観ているだけで結構な暇つぶしになった。

そして、適当に街を徘徊した後、近くのバーに入っただけのんびりしていた所、とある女性が私に話しかけてきた。

まあ、ソイツの話し口調からして誘い方に慣れていることは一目瞭然で、分からないのは、一体何人ソイツが男を食い物にしてきたかということくらいだった。自分の顔に自信があるというのは、他人も認めていることが多く、この場合もそうだった。彼女は多分、私がこういうことに関して世間知らずだと思ったのだろう。大抵の男は引っかかるような声で私を誘ってきた。

顔立ちは確かにアイツよりも魅力的で、スタイルが良く、足も長かった。今夜、あらゆる場所で品定めをした結果、私を選んだのは、性格ではない部分であろう。

その点に関しては、この女を褒めようと思う。

私は初め、軽い気持ちで冷たい二つ返事を決めようと考えたが、バーを出たとき、自分の答えた冷たい二つ返事よりも冷たい風が吹いたときに、もう少し深く考えることにした。

『今、私はこの女　名前はいつでも聞ける　の誘いに乗ったわけだが、何故、怒りに似た感情に襲われるのであるのか。思い返すと、私はまず、ドリンク半パイントを時間をかけてゆっくり飲み…』

それを理解したのはその後、同じ冷たい風を5回受けた後だった。私は女が夜を明かす場所を探している隙をうかがい、逃げ出した。いや、正確には、背を向けて歩き出していた。

『私が見た目で判断したのと同じように、あの女も私をその目で判断した。確かに、その点で不満はない。あるのはそこだけしか見な

いところだ。女は私の高貴さまで判断したとは思わなかった。そのような者に貸す体はない』

星を見て、冷たさが明らかに気持ちだけの問題ではないと気づき、私は再び来た道を戻り、バーを過ぎて、アイツの住むマンションに戻ることにした。

アイツは一度寝たら、私がいくら起しても目覚めないヤツだ。きつと起きたとしても寝ぼけ眼でトイレに行き、隣に私がいないことにも気づかずに、また寝てしまっただろう。

ゆっくりと足を進めながら目を瞑り、私は溜め息を

「い、居た」

目を開けて、ふと前を見ると、起きているはずのないアイツが息を切らせてそこに居た。アイツはゆっくりと近づき、私のわきの下に手を入れて、呼吸が止まる勢いで強く抱きしめ、私は抱きしめられた。

「もう、どこいったの？ 起きて呼んでみたら、いないんだもの。眠気なんて一気に吹き飛んじやっただから」

私は抗議しようとしたが、それよりも先に、頬を突かれて喋ることを許してくれなかった。

それから、ソイツは心配したことを叱った後、眠気が覚めたことで叱り、また心配したことを叱り、眠気が覚めたことを叱る。その

繰り返しだった。言葉というものは不思議なもので、幾度となく攻められ続けると、理不尽で非がなかったとしても、なぜかこちら側に非があると思ってしまう。

だから、私は謝ろうとしたが、

「ごめんなさい」

と、ソイツが泣きついてきたとき、思い切り溜め息をついた。

『私が太っていたら、一発キツイのお見舞いしてるところだ』

朝になり、いつもなら朝食ができると私を起こしに来るはずなのに、今日は起こしに来ることはなく、もう、朝食の時間はとうに過ぎていた。

私はあれから1年の月日を此処で過ごしている。料理、暮らしはそこそこであるが、私は、アイツの私に対する愛はそこそこではなく、私もなるべくそれに応えているつもりだ。

にも拘らず、今日は朝食を忘れていただけでなく、おかしな匂いが部屋中に充満している。それが少し鼻について気分が悪かった。私は体を伸ばして、キッチンへ向かうことにする。

朝飯をせかしてみても、キッチンにいるアイツは苦笑いをこちらに向けて、また物語の魔女のように、鍋をかき回し始めるだけだ。

しかも、時々痺れを切らしたように、地団駄を踏んでいた。
いったい何を作っていることやら。と、思った私に対して、意表
をつくインターフォンがなった。しばらく、アイツの行動をうかが
っていたが、もどかしくてしょうがなかった。
はつきりいえよ。^{ゲットウ}_ザ ^{ポイント}
答えはもう、決まっているだろう？

「ニヤア」

しまった。見届けずに声に出してしまった。
コイツは今日、呼び出した彼に告白するようである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1525u/>

Get to the point. ~ 魔女? ~

2011年10月8日04時44分発行